

31年間、伝道、牧会に携わってきた横浜港南台教会で、最後の主日礼拝後、盛大な「お別れ会」をしていただいた。感謝の言葉を受け、こちらが恐縮しました。用いられてきた幸いを、率直に嬉しく感謝でした。

友人、知人に「隠退のご挨拶」の葉書を350通くらい送った。その挨拶に対し、多くの方から、手紙、電話、メールをいただいた。長い間、ご苦労様でした。しばらくはゆっくりお過ごしください。時間ができるでしょうから、お越してください。自由な立場から、広い視点からの牧師の務めを期待しています。優しさにあふれた、ありがたい言葉をいただき、本当に嬉しかった。そして、思いがけない方からの言葉に、驚かされた。私の牧師の生涯は、呻きながらの日々であったが、見守り支えてくださったものであったことを、改めて知らされている。

クリスチャンでない三人の言葉を嬉しく思った。中学生の時、可愛がってくだった国語の先生から、慰労の電話をいただいた。以前「教会創立30年史」を贈ったが、教会の成長を喜んでくださった。先生を退職された後、近所の方々から請われて、神職になられた。現在、奥様はホームに入居され、お一人で暮らしていると言われる。80歳を大分超していると思う。厳しい生活の中から、私を思い出してくださった恩師の心遣いに感激した。

高校生時代の友人から「振り返ることは必要ありませんですが、大変お疲れでした。これからは、更に大きな観点で世の為人の為に勤めてください。幸い、健康な心身をいただいて、これからの人生と拝見しておりますので、それも可能かと思えます」という言葉をいただいた。私が牧師になると言った時、彼から「神様という言葉を使わなくて、神を表すような牧師になれ」と言われたことを、忘れたことはなかった。

また、下記のようなメールをいただいた。「おもえば延岡三ツ瀬教会時代に出会って、はやくも40年が過ぎました。あの頃、秋吉さんのおかげでM・ブーバーの『孤独と愛-我と汝』、ニーグレンの『エロースとアガペー』に出会ったことが、その後の私の詩精神の根底を形作ってくれました。いま思えば、これはやはり恩寵というものだと思っています。ありがとうございます。心より感謝を申し上げます。」彼は、諸々の賞を受けている詩人である。